京都文教大学教員による宇治商工会議所会員企業紹介

組織づくりを研究する多湖が見た企業の魅力

《第３回》 プロニクス株式会社

2024 年 7

現代の企業組織を経営する際に、顧客や社員の方々とのコミュニケーションは非常に重要なものであることは周知の事実です。組織におけるコミュニケーションは、良くも悪くも、その組織に関連する「人」に対して多大な影響を及ぼします。世間を見渡しても、コミュニケーションを通じて「人づくり」に貢献している企業には、優良企業が多いものです。

経営学を専門とする大学教員が、社内のコミュニケーションを活発に行い「人づくり」を実践している中小の優良企業に焦点を当て、取り組み内容などを紹介していきます。今回はプロニクス株式会社様（以下、プロニクス）にご協力いただきました。

【コミュニケーションを通じて「人づくり」に貢献する企業】

プロニクス（株）代表取締役社長
森本 奈美氏 取材

プロニクスでは、社長を含めた社員同士のコミュニケーションが活発に行われており、社員間の関係性が良好に保たれています。そもそも、社長には、顧客や社員の方々への感謝を忘れずに、より良い会社を作っていきたいという思いがあるようです。社員の方々と一緒にやっていくというスタンスで仕事を始め、継続してきた結果、社員からは「毎日あいさつや声かけをしてくれる」、「社長は社員を信頼して任せてくれる。だからといって任せっぱなしではなく、大事なことは決断してくれる」などの声があがるようになり、大きな信頼を得ているようです。

会社内の様子

このようにプロニクスでは、社長を含めた社員同士のコミュニケーションが活発に行われています。加えて、社内のコミュニケーションを活発に行うための工夫もなされています。例えば、部署内で4～5人の少人数チームを複数つくり、それぞれのチームが相互に（良い意味で）関わり合っているようです。困っていそうな人には積極的に声かけを行い、場合によっては面談も行うなどの対応をしているようです。

プロニクスは、コミュニケーションを活かした「人づくり」を行っています。中でも外国人の活躍推進に力を入れています。例えば、近年はベトナムにあるグループ会社よりベトナム人を技能実習生として毎年3～4名程度受け入れ、開発途上国の経済発展を担う「人づくり」に貢献しています。ベトナム人技能実習生と一緒に働くことで、言葉の問題や習慣の違いなど苦労する場面もあるようですが、積極的にコミュニケーションを取り合うことでカバーされているようです。

こうして文字すると簡単なことのように思うかもしれませんが、社内のコミュニケーションを活性化させ、関係性を良好に保つことは非常に難しいことです。プロニクスの姿勢や取り組みは見習うべきところが多くあると感じました。

【今回の取材先】

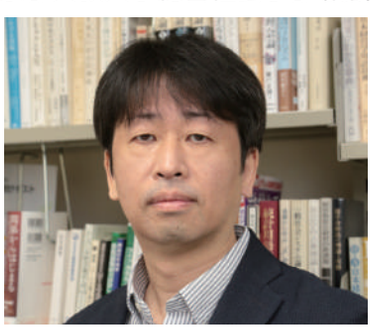
愛と勇気と品質の PRONICS

プロニクス株式会社は、1989年に寸法測定専門受託会社として京都市南区に株式会社では初めての測定会社として設立しました。現在は、宇治市槇島に本社を構え、プラスチック成形品、プレス部品、機械部品、プリント基板などの測定データアップなどの検査測定やプラスチック成形部品の製造及び金型製作などを行っている、きめ細やかなサービスを提供している企業です。

ホームページ

【筆者プロフィール】

多湖 雅博（たごお まさひろ）
京都文教大学総合社会学部 講師



組織開発を中心に、健康経営、組織行動、組織マネジメントなどを研究しており、従業員と企業がWin-Winの関係を築ける組織を経営学の視点から考察している。著書に『経営理念・経営ビジョン／経営戦略』（日本医療企画）、『職場の経営学：ミドル・マネジメントのための実践的ヒント』（中央経済社）などがある。

京都文教大学 総合社会学部で、組織の経営やマネジメントに関する調査・研究を行う多湖先生。令和５年度から年に２回程度、宇治商工会議所会員企業で組織の内面を磨き発展している会社を取材し、記事として掲載しています。